

企画展の舞台裏 —平成15年度附属図書館公開企画展を終えて—

附属図書館情報サービス課参考調査掛 藤原由華
(公開企画展ワーキンググループメンバー)

このたび、公開企画展「和算の時代—日本人の数学力をたどる—」にワーキンググループの一員として参加し、教官と力を合わせて展示を作り上げるという、非常に面白い経験をさせていただきました。ここに、私がかかわった範囲で企画から開催までを断片的に取り上げて、企画展の舞台裏を少しでも紹介したいと思います。

・和算って何だ

今年度の企画展テーマは「和算資料」と決まったものの、私たちはほとんどみな「和算って何？」という状態からの出発です。そこでまず、理学部数学教室に押しかけて、上野健爾先生に特別レクチャーをしていただきました。その後、各自参考図書やウェブページ、そして何よりも展示資料を通して、おぼろげながらも「和算」と江戸時代の人々の豊かな数学の世界について、少しずつ理解を深めていきました。

・ネタを探せ

今回の展示会構成の中で、第1章「「数」のある風景」と第2章「数学力の原点—32の塵劫記」は、章構成から解説まで、全て私たち図書館員の手ゆだねられました。とくに第1章は、一から資料を探さなければなりません。手分けして、数や数学にかかわる文学作品・歴史資料等をピックアップし、京大での所蔵を確認する、という作業が続きました。先行研究の確認はもちろん、辞書の用例・文学索引のたぐい等々、手探りの調査でしたが、非常に面白い作業でした。たとえていうなら、宝捜しの面白さとても

言えるでしょうか。

・親しみやすさを目指して

今回の企画展は、専門家だけではなく、高校生や一般の方にも楽しんでいただける展示会にすることに、初めから重点を置いていました。そのために、例えば第2章では、絵に着目して同じ問題のさまざまなバラエティーを楽しんでもらう、という方法を取りました。また、問題の解き方の解説パネルも用意しました。図録原稿も含めた全ての解説文は「ですます」体に統一し、ポスターも親しみやすさを前面に出したデザインにしました。

・工房の職人たち

資料選定・構成・解説執筆が一段落すると、実際の展示作業に入ります。資料を搬入し、バランスよく配置していきます。それが済むと、解説文などを、レイアウトをよく考えてプリントアウトした後、粘着パネルに貼って、切って...というパネル作成の作業がひたすら続きました。また、今回は大きな地図を出展していたため、それをどのように展示するか、工夫が必要です。パネルを2枚貼り合わせ、アクリル板で押さえつけて固定しました。開催1週間前の展示会場は、まさにどこかの工房のよう。みな、鉛筆と定規とカッターナイフを手に、一心不乱に作業を続けました。

また、算木の複製は、ワーキンググループの特別チームが、材料から塗装、仕上げに至るまでこだわって作成した、まさに職人技が光る逸品です。

以上は、今回の企画展準備のほんの一端に過ぎません。サービス課長・専門員は様々な方面との折衝・調整に奔走し、共催の思文閣美術館の方々にも様々にご尽力いただきました。そして何にもまして、上野先生のあらゆる面での惜しみないご協力がなければ、この企画展は開催には至らなかったでしょう。できる限りのことは図書館員の手でやろう、との意気込みで臨んだ今回の企画展でしたが、3・4・5章全ての解説執筆・資料選定に加えて、全体の監修、他

機関からの展示品貸借にいたるまで、先生には多大なご負担をおかけしました。にもかかわらず、いつもにこやかに引き受けてくださった先生のお人柄に、メンバー一同、心より感銘を受けました。

教官と図書館職員がそれぞれ力を出し合って創り上げた附属図書館公開企画展、お楽しみいただけましたならば幸いです。

(ふじわら ゆか)

